

人間社会と精神の起源

平山 朝治

On the Origin of Human Societies and Spirits

Asaji HIRAYAMA

Abstract

In social sciences the origin of human societies has often been investigated based on the theory of social contract that regards society as a complex of individuals or monogamous nuclear families. But recent developments in evolutionary biology suggest an alternative story.

The family of gorillas, the unit group of chimpanzees and that of bonobos are patrilineal (exactly speaking the family of gorillas is non-matrilineal). Once daughters leave their native family or unit group they have no connection with it. So we can regard relative by marriage as an innovation that distinguishes human society from the societies of other Anthropoids.

We can explain relative by marriage as a result of the desire of incest. Man regards his daughter's or sister's husband as his stunt man of incest unconsciously. In other words he regards his son or brother in law as a symbol of himself and his wives as those of his mother and sisters. Woman regards likewise. So the idea of relative by marriage must be the root of human symbolism. We insist that Homo sapiens is the first and the unique species that has the desire of incest because other species belonging Homo genus had not developed any artistic works nor other genre of symbolism at all.

Finally we demonstrate theoretically that the neoteny of Homo sapiens is due to high rate of inbreeding by parent-child and brother-sister couples during the evolution of our species, and that the earliest family had been constituted by incestuous couple and their children until incest taboo and relative by marriage were established.

キーワード: ヒト上科 進化 父系(非母系) 一夫多妻 インセスト回避 インセスト願望 姻戚関係 シンボル ネオテニー 家族の起源としてのインセスト

1. はじめに

人間社会の起源に関する社会科学的考察は、社会契約論的なパラダイムを明示的ないし暗黙の前提としていることが多い。原始状

態を出発点にとって、そこで見られる無秩序などの問題を克服すべく、社会が形成されると想定されるわけである。このパラダイムにおいては、個々の人間がまず登場し、しかる後に社会が形成されるということが自明視さ

れている。このパラダイムは暗黙のうちに成年男子のみを主体とするような家父長制の価値観を背景として登場したので、ここでの出発点としての個人とは、独立性の高い単婚小家族の家父長たる男性であることが多く、その場合、人間社会は単婚小家族を基礎単位として形成されたと考えられていることになる。

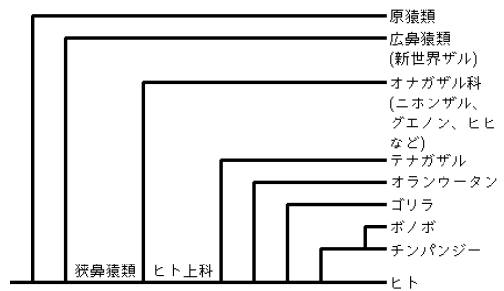
しかし、現実の人間は、母親から生まれ、言語・文化・習慣を周囲から学ぶことを不可欠としているのであるから、個々人を出発点にとる説明は明らかにおかしい。単婚小家族を基礎単位とすれば、この問題は一応クリアできるが、人間がそこから分岐して進化してきたような、人間と他の類人猿との共通祖先たちが単婚小家族を基礎単位とはしていなかったことは、ゴリラ、チンパンジー、ボノボといった人間に近い高等類人猿がみな、雌雄一対とその未成熟な子供たちからなる単婚小家族よりも規模の大きな父系血縁の生殖集団を形成していることからして、ほぼ間違いないことである（ゴリラは厳密には非母系）したがって、単婚小家族を出発点の基礎単位とし、それが多数寄り集まって人間社会が形成されたと考えることには、無理がある。このような理解は、より複雑な家族形態も単婚小家族の複合体と考えることになり、人間社会にとって単婚小家族を普遍的で変更不可能な基礎単位とみなすことになるが、そのような発想が近代家族の歴史的相対性の認識を妨げる点も、批判されてきた。

これらのことを踏まえるならば、人間社会や人間精神の起源への問いは、高等類人猿の集団生活と人間の社会生活の質的な差異が何であり、それに付随する人間精神の独自の働き方が何に由来するものであるか、ということ、を、まず念頭に置かなければならないことになる。それは、霊長類、なかでもヒト上科（ヒトニザル上科とも呼ばれてきたが、人間もそれに含まれる点に注意）のなかからい

かにして人間が生まれてきたかという、生物進化論の問いとして、まずは問われなければならないことになる。

2. ペア型社会の崩壊

そこで、霊長類社会が進化してやがて人間社会が誕生するプロセスを、京都大学を中心とする霊長類研究によって解明されてきた社会構造に焦点を当てながらたどってみよう¹⁾。狭鼻猿類のヒト上科にはテナガザル類、オランウータン、ゴリラ、チンパンジー、ボノボ、人間（ヒト）が属しており、人間を除くヒト上科の猿を類人猿と呼ぶ。



(出所：<http://jinrui.zool.kyoto-u.ac.jp/ChimpHome/chimpanzee.html>)

人間に至る類人猿の系統樹から一番古く分かれたのがテナガザル類である。彼らは一夫一妻のペアがそれぞれ縄張りを構え、子供が思春期を迎えると同性親との間の反発・敵対的關係が強まり、両親の援助を受けるなどして、独立した縄張りを構えるようになり、やがて伴侶をみつけてペアで縄張りを構えて一人前となる。人間社会でいえば、私有財産制度と結びついた単婚小家族（核家族）社会である。伊谷によれば、このようなテナガザル社会のありかたは「ペア型の社会単位をもつ原猿類からおそらく一歩も出ない保守的な形態だというべきなのである。」²⁾。

類人猿はまず、原猿類から引き継いだペア

型社会から出発し、それがテナガザル類に残ったが、この社会構造を支えるものは、同性同士の反発関係と異性同士の永続的な絆を求める志向とであり、両者の均衡解がペアごとの縄張りということになる。

テナガザル類とは異なる道を歩み始めたヒト上科には、いかなる変化が見られたのだろうか。伊谷によれば、年周期的な交尾期がなくなるとともに妊娠と育児の期間が長くなり、メスが性的にインアクティブとなる期間が個体によって異なるとともに長期化するにつれ、ペアの求心力が弱まったと考えられる。また、山極によれば、個体の増加や生息域の狭まりのため個体数に比べて食物が乏しくなってくると、相互に縄張りを尊重して共存することが困難となり、そのような状況に陥ったヒト上科は、ペアと縄張りとを解消するに至ったと思われる。伊谷は、このようなペア型社会構造の解消に、霊長類社会の進化における大きな画期を見出している。実際それは、単婚小家族の規模を超えた複雑な社会構成へと向かう試行錯誤の第一歩であったが、単婚小家族を基礎単位とするのではなく、それを解消した上でより大規模な社会の形成へと向かったのである。

系統樹から次に分かれたオランウータンは、オスがメスと比べて広い遊動域をもち、体重もメスの二倍近いが、各々の個体の遊動域は排他的でなく、オスは自分の遊動域内のメスをつぎつぎに訪問し、短期間の交尾関係を持つ。子供は思春期に達すると雌雄共に母親から離れる。ここでは、同性同士の反発関係を維持しつつ、異性同士の関係も一時的なものとなる、という方向での進化がみられる。

その次に分かれたゴリラは、オランウータン同様、オスの体重はメスの二倍近いが、一頭のオス、数頭のメスとその子どもたちからなる、一夫多妻の家族を形成している。複数のメスは、お互いの無視と許容によって共存

しており、同性間の反発関係はメスについては弱まっている。思春期を迎えた子供は、オスメス共に親元を離れ、メスは出産するとそのオスのもとに定着するようになる。オスは親元の近くにしばらくの間ついてまわるが、やがて離れて、未配偶のオス同士の集団をしばしば作り、そこでは雌雄間よりも激しい同性愛行為がみられる。

父親が老齢の場合、息子は成長しても親元を離れず、年下の異母妹と配偶関係を持ち、やがて父が死ぬと家族を継承することもある。このように、ゴリラは一夫多妻・末子相続的な直系家族社会を形成している。

ゴリラ社会においては、一夫多妻や未婚男性集団とそこでの同性愛、父から息子への家族継承という形で、同性間の反発関係が弱められているものの、家族集団相互の関係は、家父長たるオス同士の反発関係を強く残しており、メスの移籍は姻戚関係による家族連合の形成に結びつくことはない。

人間、チンパンジー、ボノボはおそらく、このようなゴリラと似た社会状態を経つつ、さらにオス同士の反発関係を抑制しようとするような進化のなかで、独自の社会をつくるようになったと思われる。

人間はおそらくチンパンジーやボノボの共通祖先から500～700万年前に分かれた。チンパンジーとボノボは250万年前に分かれており、両者は社会構造も非常に似ている。彼らはいずれも、父 息子・兄弟といったオスの父系血縁集団を形成し、協同でメスを囲い込んで、そのなかで雌雄は乱交的關係を結ぶ。子供については、オスは集団に残り、メスは思春期になると外に出る。ボノボでは、新たに集団に入ってきたメスは古参のメスとの間で、ホカホカと名付けられた、性皮をこすりあう同性愛行為をさかんに行う。このように、乱交（オスの世代区分のない多夫多妻ともいえよう）集団内において、オスは血縁による絆、メスは同性愛関係によって、同性間

の反発関係を乗り越えているが、集団を異にするオス同士の反発関係はやはり強く見られる。

チンパンジーやボノボの性行動は、一見人間とはかけはなれているように思えるが、必ずしもそうとばかり言えないかもしれない。たとえば、同じ父系集団のチンパンジーのオスは徒党を組んで他集団のオスを襲撃するが、人間においても集団間の戦闘は主に男が行い、勝者は敗者の集団に属する女性を犯し、しばしば輪姦が行われる。類人猿においては、メスがオスを受け入れない限り性交が成立しないが、人間には、男が女を暴力的に強姦することが顕著であり、そういう場面においては、男の集団が女たちを囲い込み、輪姦などの形でいわば共有するということがある。人間の場合、性愛は持続的な二者関係を志向しがちなのに対して、愛情を欠いた性関係、とりわけ暴力的なものは、乱交的になりやすいとすれば、後者の面において、チンパンジーに通じる性行動を指摘しえる。なお、ボノボのオスは人間やチンパンジーほど好戦的ではなく、他集団のオスと争うことはない。

暴力的に女性を征服したり、集団で暴行・輪姦するという人間の男の行動は、対象となる女性を対等な人間としてはみなさず、しばしば殺害までしてしまう。それはおそらく、オス達が協同して仕留めた獲物の肉を共に食べるという狩猟文化が異性関係にまで影響を及ぼしたものである。チンパンジーにも、オス達が協同で狩をし、肉を共食・分配するという行動が見られる。チンパンジーのオスがメスを狩りのように無理矢理強姦することがあまりないのは、メスのほうが膨張した性皮によってオスを挑発して複数のオスと積極的に交わり、オスの性衝動はメスの発情に条件付けられているからだ。その点をのぞけば、「一頭の発情したメスと、集団の主だったオスたちが、つぎつぎと、しかもほかのオ

スたちの目の前でなんのジェラシーもひき起こすことなしに交尾をする³⁾」というチンパンジーの性は、人間の輪姦と極めて近いのである。また、チンパンジーのオスは、メスを強姦のうえ殺害することはないが、異なる集団に属する母親が連れてくる子供を食べることによって発情させるという、狩猟と性行動との結び付きが見られる点も、人間に極めて近いというべきだろう。また、一般に乱交的とされるチンパンジーにも、特定のオスが特定のメスを囲い込んで長期間配偶関係を維持しようとする場合がある。

人間は、ゴリラに近い社会構造を保ちながら、チンパンジーやボノボとは違う進化の道をたどったと、山極・榎本らは考えている。その根拠としてしばしば挙げられるのは、1947年にエチオピアのハダールで発見された、約300万年前の猿人アファレンシス13人の化石である。男は女の2倍近い体重を持ち、集団の規模もゴリラの一夫多妻家族と近いことから、この時代の猿人はゴリラとよく似た一夫多妻家族を形成していたと推定できるのである。民族誌データによれば、厳格に一夫一妻をとる人間社会は約2割にすぎず、大部分の社会は一夫多妻と一夫一妻の混合によって特色づけられる⁴⁾。

以上のようなヒト上科の社会構造の進化は、人間社会の進化に関する常識的理解と大きく食い違っている。つまり、単婚小家族を不変の基礎単位として出発点に置くことはできない。民族誌データからみても、一夫多妻は一夫一妻に劣らずしばしば見られる家族形態なのであり、ゴリラとの連続性を考慮すれば、一夫多妻が基本型であろうと山極や榎本は考えている。

テナガザル的な単婚小家族が形成される必要条件は、共存不可能なほど強い成体同性間の反発関係の存在である。これによって、成人した子と異性親との同居が嫌われるととも

に、一夫多妻や一妻多夫などの複婚も嫌われ、一夫一妻と未成熟な子供からなる閉鎖的な小家族が帰結する。したがって、男女問わず同性愛を嫌う社会慣習が普及してはじめて、あたかも単婚小家族を強固な基礎単位とするかのような社会構造が生成されるのである⁵⁾。

人間社会における異性親子間の反発関係を強調したものに、フロイトのエディプス・コンプレックス理論がある。エディプス・コンプレックスが成立するためには、母を巡る父

息子間の性的ライバル関係が強くなければならず、そのためには、父 息子間の同性愛心理が強く抑圧されなければならないはずである。

人間の性愛は、母子関係に由来する優しい身体的接触と、非権威的な遊びにおける対等性とが合わさった性格を持っており、権威的な上下関係となじみにくいので、家父長的な家族においては、父 息子間の同性愛心理は抑圧される。また、それほど権威主義的でなくとも、同性愛一般に対してタブー意識が強ければ、父 息子間の同性愛的関係は抑制される。逆に言えば、家父長の権威と同性愛のタブー意識がともに弱まれば、エディプス・コンプレックスは消失すると言えよう。

同性愛は、生殖という目的に合うように進化プロセスで形成されてきた異性愛と比べると、一見余分なものとも思えるが、人間以外の霊長類にも広く見られる。そこでは異性を巡る性的ライバル関係に由来する反発・敵対が同性間に強く見られるか、オスないしメスの同性間の共存関係が、同性愛などとして見られるかに応じて、それぞれの種の社会構造が大きく規定されている。単婚小家族という近代社会の規範を相対化し、多様な家族形態の可能性を求めるポストモダン的な思想がしばしば同性愛の復権を説くことには、テナガザル風のペア型社会崩壊以降のヒト上科に共通する社会構造上の普遍的特徴をふまえた根

拠があるとも言えよう。しかし、同性愛禁忌に劣らず単婚規範は人間にとって不自然なものであり、これからの社会における多様な家族形態の展開のためにも、同性愛の復権と重婚の許容とはワンセットとして主張されるべきである⁶⁾。つまり、単婚規範は人為的にペア型社会へと先祖返りしようとする反動的な試みであり、人間社会から適応力と柔軟性を奪ってしまう点で、同性愛禁忌規範と表裏一体なのである。

3. インセスト願望が生み出した姻戚関係

ゴリラ、チンパンジー、ボノボはいずれも、父系的な単位集団からなり、メスの多くは生まれた集団から他の集団へと移籍してそこで妊娠・出産する。メスの移籍に伴って姻戚関係が形成されないのは、一度集団から離れたメスと、残った成員との間の絆が失われてしまうということでもある。彼らにおいて、複数の単位集団の間に近隣関係が成立したり、上位のコミュニティーが成立したりしないのは、メスの移籍のこのような性格によるものであろう。

逆に言えば、婚出した女性が、生まれ育った単位集団の成員との間の絆を保ちつつ、新たな絆を結ぶことによって、姻戚関係が生まれるという現象こそが、類人猿から人間への飛躍の鍵であったことになる。それではなぜ、人間においてはじめて、姻戚関係が生まれたのであろうか？

ゴリラ、チンパンジー、ボノボにおいては、血縁関係の近い成体異性間の性交を避ける心理が遺伝的に組み込まれており、インセスト回避を帰結している。メスが生まれ育った単位集団から出て行った後、出身集団との間に何の繋がりも残さないのは、このような心理によって、近親異性間の絆が断ち切られてしまうからであろう（家族を継承する異母兄と結ばれたゴリラのメスは例外であり、兄

との結婚後も父と親密な関係を保つが、父とのインセストは忌避される)。したがって、類人猿にみられるインセスト回避志向と拮抗して、近親異性間の繋がりを保ち続けようとする心理が新たに付け加わったことによって、人間は姻戚関係を持つようになったと考えることができよう。それは要するに、インセスト願望であり、ある時期に人間はそれを獲得し、それ以後遺伝するようになったのであろう。

フロイトがインセスト願望の普遍性を説いたのに対して、ウェスターマーク⁷⁾が、家族をはじめ、子供のころから一緒に生活している人々の間には性的な無関心や嫌悪が発達すると説いて以来、近親間の性的な心理を巡ってこの二つの系列の見解の対立が続いてきたが、フロイトは原父の実力による近親女性の独占、ウェスターマークは乱婚と、人類史の初期における性的秩序の欠如から議論を始めているという点で両者は共通している。しかし実際には、霊長類においては一般にインセストを回避するような社会構造が見られ、インセストを避けるような個体の心理まで遺伝的に組み込まれていることが明らかになってきたのであり、ウェスターマークが強調したインセスト忌避は人類以前からのもの、フロイトが強調したインセスト願望こそが人類独自の新たなものという風にして、両説が指摘する矛盾した性向を、人間は抱え込んだわけである。

矛盾する二つの性向それぞれの強度には個人差や文化差があるとしても、インセストを巡る回避と願望という心的葛藤は人間たちの間に普遍的に見られるようになり、インセスト・タブーという社会慣習が生み出されることになっただろう。それは相矛盾する心性の妥協であるから、ローマ帝国下の一時期のエジプト⁸⁾のように同父母きょうだい婚を許すものから、中国のように血縁は定かでなくても同姓不婚を強いるものまで、さまざまな形

があらわれえるし、相対的で移ろいやすいものとならざるをえず、人間社会の多様性と柔軟性が帰結する。また、どんな社会においても、ある範囲のインセスト・タブーが設定されたところでそれに対する違犯例が現れえることにもなり、ロイヤル・インセストのように一部の人々の特権となったり、性規範の変更が社会改革の大きなテーマとなったりすることにもなる。

インセスト願望は、未婚近親女性への男性の愛着を強めるが、タブーゆえ他の集団の同性に譲り渡さなければならない。そこで、男性は、近親女性を譲り渡す相手の男性を吟味し、自分と彼とを同一化して、禁じられたインセストの実現を彼に託そうというような気持を抱きがちになる。自分と比べてあまりに優れたり劣ったりするため、同一化しにくい男を娘や妹の結婚相手として認めたくないという気持を持つ男は少なくないだろう。同性との同一化が激しくなれば、愛する女性を共有するという形であらわれた一種の同性愛心理にもなりえる。婚出する女性も、自分の父や兄弟と夫とを同一化しがちだから、異性近親と夫とが親しくなることを望む。すなわち、女性を介した男同士の姻戚の絆は、近親異性間のインセスト願望と同性間の友愛や暗黙の同性愛の合成物として可能となったのである。類人猿にはないインセスト願望こそが、やはり類人猿にはない、女性の与え手と受け手との間の男性同士の連合という、人間社会の新たな可能性を開いたのである。このことは男女入れ替えても成立するだろう。つまり、近親異性の配偶者を、抑圧された相姦願望の実行者として、同性の血縁者に準ずるような自己の分身とみなす心理と、近親異性と配偶者とを同一化する心理とが、結婚や姻戚関係の基礎にあると言えよう。

このように結婚をとらえるならば、それは、孤立した男女がペアを組むことではなく、少なくとも一人の近親異性と、少なくとも一人

の配偶者と、自分自身とからなる、多角形的な関係の形成であり、その論理の基本は二人の同性を一人の異性が結びつけるという三角関係をモデルとして理解しなければならない。このモデルは、一人の異性を巡る二人の同性の間の争いの原型とされるエディプス・コンプレックスとは根本的に異なり、一人の異性を同性同士で共有するものなので、両親と子供の関係においては、同性親と自分自身とが異性親を共有しようとするような心性を基礎としていることになるだろう。

そして、血縁関係に配偶関係をなぞらせることによって、前者は婚出後も持続し、後者は血縁に準ずる永続性を要請されることになるというように、インセスト願望は人間関係を安定化・永続化させる効果をも持つことになる。

もちろん、当事者、父親、母親などの思惑が一致する保証はなく、紛糾しがちなので、結婚は社会的な承認を要する出来事となり、結婚を決める際に誰の意向を優先するかを巡って社会規範が形成されがちになるのだが、その規範がどうであれ、以上のような近親相姦願望に由来する心理が、ヒト上科のなかでも人間特有の、終生続く異性間血縁関係と、永続を目標とする結婚や姻戚関係とを同時に生みだしたことに変わりはない。

従来、結婚が社会的承認を要する理由としては、女性の性的独占に関する、同じ女性を巡って性的ライバルたりえる男同士の相互承認という説明が多かったが、ゴリラ以降、父系血縁によって形成された単位集団がその所生子をかかえたメスを独占しようとし、メスも妊娠出産するとその単位集団に留まろうとする傾向はあり、それで自ずから、メスの所属を巡る秩序は成り立っていたわけだから、異なる単位集団にまたがって女性の所属に関する承認をとりつける動機としては、女性の性的所有を巡る男性間の争いの調整という説明はあまり説得力を持たないだろう。

また、男性による女性の性的独占の相互承認という発想は、家父長制的なものであり、姻戚関係が成立した当初においてはほとんど意味をもたなかっただろう。このことは、日本については高群逸枝らによって解明されてきた⁹⁾。

ゴリラ以降の類人猿と比べて性差の少ない人間においては、むしろ、単位集団への帰属や去就は女性の自主性に委ねるのが、自然な帰結である。それを越えた承認を欲しがるのは、女性を受け入れえる側の男性ではなくて、女性を送り出す近親男性なのである。このことは、アカデミックな議論では盲点となってきたが、現実を反省すればすぐに思い当たることであろう。自由恋愛結婚が普通の、トロブリアンド諸島においても、今日の日本においても、娘の父親の承諾をいかに得るかということが、結婚に際して最大のハードルとなっているからである¹⁰⁾。

伊谷は「霊長類社会の進化の方向というのが、集団のサイズをより大きくするという方向性と、特定のオスとメスのより安定した結びつきを達成するという相矛盾した二つの方向性に支配されてきた¹¹⁾」ととらえており、テナガザルやゴリラは前者、チンパンジーやボノボは後者が支配的であるとするが、姻戚関係の成立は、血縁異性へのインセスト願望実現を他の同性に託することによって、異性を介して同性同士を結びつけ、二つの方向性の矛盾を止揚するという画期的な創造的革新であったと言える。これによって人間は、霊長類社会の前に立ちはだかつてきたジレンマを突破することになったのである。

女性を共有することによる男性同士の絆の形成は、イヌイット（かつてはエスキモーと呼ばれていたが、差別的な意味があるので今日ではその呼称は使われない）における妻貸し慣習にもみられる¹²⁾。彼らの間では、友人や遠来の客への接待として、妻に性的な

サービスをさせ、彼女のサービスを拒絶することは、男同士の友誼に反することと意識されている。

さらに、相手の男と妻が意気投合して駆け落ちした場合には、男は慰謝料を支払い、元夫と新夫は義兄弟になる。ここでの義兄弟とは姻戚関係とのアナロジーであり、元夫は姉妹を嫁にやった男に擬せられていることになる。これを一步進めれば、義兄弟が一人の妻を共有するような一妻多夫となる。これらの例は、姻戚関係のアナロジーないし拡大解釈として、異性を介した同性関係は捉えられることを示唆している。

トロブリアンド諸島のクラ交換における贈与者と受贈者との関係が、幼児期に抑圧された母子相姦になぞらえられる¹³⁾ことも、異性や財物の交換が、近親相姦願望と密接な意味的繋がりを持っていることを示している。すなわち、異性の交換に限らず、贈与と返礼など、交換を通した人間関係の形成は一般に、近親相姦を巡る忌避と願望の相剋という人間精神の所産であることになる。

近親者以外の者が近親者の代わりとなってインセスト願望を実現するという捉え方は、配偶者を近親者の象徴とみなすことである。社会的な規約に従ってある事物を別の事物で表現するという、人間に特有なシンボル思考も、インセストに関する願望と回避との間の精神的葛藤を処理し、姻戚関係を形成するなかで、生み出され、それが拡大・一般化されることによって言語が発達したと考えることもできるだろう。本来は異性きょうだいを意味する「妹背」が夫婦をも意味するのは、そのようなシンボル思考の原初的な発想を反映しているといえよう。このような人間精神の開花のもとになったインセスト願望は、まさしく禁断の果実そのものであったと言えよう。

また、インセスト願望実現を配偶者に託すということは、自分を想像上異性子の配偶者

の立場に置いたり、配偶者を想像上異性親の立場に置いたりすることでもあり、状況を想像上交換して他人の立場に身を置くという、共感能力の根源にあるともいえよう。そのような共感能力が後には世界宗教の普遍主義的倫理にまで結実するのである¹⁴⁾。

他者への共感が成立するためには、自分と他者とが異なっているという認識が前提されなければならない。ところが、4歳未満の子供と類人猿は、自分と他者とが違った考えを持つということが理解できないことが分かっている¹⁵⁾。4歳ころとは、フロイトによれば、幼児性欲・近親相姦願望が芽生える時期であり、おそらくこのころから、人間の心の中にはインセストを巡る願望と回避という矛盾した心的傾向の葛藤が芽生え、自分の心のなかでのこのような葛藤を処理する際、分裂した自分の一方を他者に投影することによって、他者が自分とは異なる考えを持ち得るということをも自分の心の中で定位できるようになるに至ったのであろう。

4. インセストとネオテニー

以上のような、インセスト願望に起因する飛躍は、いつごろのことだろうか？山極は姻戚関係成立の要因としてインセスト願望を挙げておらず、その成立時期としては森林から草原へと活動の場を移した人類初期を想定している¹⁶⁾が、猿人の登場と、約250万年前ころ気候が寒冷化した際のホモ属¹⁷⁾出現のどちらを指しているのであろうか¹⁸⁾。いずれにせよ、この説においては、生活環境の変化による、ゴリラ的な家族がいくつも集まって協力するメリットの発生が重要であるが、そうだとすると、チンパンジーやボノボの単位集団のように父系血縁関係にあるオスたちの群れのなかに父系家族が融解し、父親を特定しなくなった可能性が高いのではなかろうか。家族が存続したとしても、父系祖先を共

にする家族が集まった上位集団が形成される可能性が高く、その場合、女性は生まれ育った上位集団から出るはずであるから、集団内で姻戚関係が形成されることはありえない。

気候が寒冷化したため、食料調達も困難になって一家族の人数が減り、一夫多妻型社会であるにもかかわらず一夫一妻が増えるとともに、外から女性が婚入してくる可能性が減って血縁同士でインセストを犯すという冒険に走った結果、遺伝子の偏りが生まれて一挙に進化が進み、形態的にもネオテニーが進んでホモ属の原人が登場したと、榎本は推定しているが、たとえ一時的にインセストが頻発したとしても、姻戚関係形成には結びつかなかったのではなからうか¹⁹⁾。

原人の登場(ホモ属の出現)よりはるか後、新人(ホモ・サピエンス)が登場した時期に姻戚関係が創始された可能性が、最も高いのではなからうか。ミトコンドリアDNAの分析に基づく最近の研究によって、現生人類ホモ・サピエンスの起源は13~20万年前のアフリカであり、ミトコンドリアのイブと呼ばれる一人の女性が、現生人類全員のミトコンドリアDNAの源であることが明らかにされた。これは、従来支配的であった多地域進化説、つまりホモ・エレクトスがアフリカからユーラシアに進出し、北京原人がアジア人に、ジャワ原人がオーストラリア原住民に、ネアンデルタール人がヨーロッパ人に進化したという説を覆し、ミトコンドリアのイブのいたアフリカ起源のホモ・サピエンス集団が他のホモ属を絶滅へと追い込みつつ拡散・増殖したことを意味している²⁰⁾。それほどの生存競争上の優位を獲得するような変革は、社会構造・精神能力上の革新と結びつくものだったはずであり、それはインセスト願望に基づく姻戚関係の形成、物財の交換とシンボル操作以外にありえないのではないかと、という仮説を私はここで提起してみたい。

実際、新人の登場は、石器制作技術の急速

な進歩、高度な言語が使えるような身体的特徴の獲得と芸術の創始を伴っており、シンボル操作能力が新人の優位の鍵であることは通説となっている²¹⁾が、私見では、そのような革新の根源はインセスト願望に起因する姻戚関係形成と考えられる。ヨーロッパでは4万年前から3万年前の一万年間、ネアンデルタール人(ホモ・ネアンデルターレンシス)とクロマニヨン人(ホモ・サピエンス)が同所で共存していたが、クロマニヨンは芸術やシンボルを始めていたのに対し、ネアンデルタール人はそれを欠いていた。インセスト願望がシンボル能力の起源にあるという上記の理論的帰結とあわせれば、新人においてはじめてインセスト願望が芸術やシンボルを生み出し、それらは当時同所に共存していた他のホモ属には伝播しなかったということになる。

ネアンデルタール人は数十人規模の「バンド」集団を形成し、彼らには家族という単位はなかったらしい²²⁾。だとすれば、彼らの「バンド」は所生の女子を外に出す父系的単位集団のはずであり、おそらく乱交的なチンパンジーの単位集団とよく似たものだったことにならう。

それに対して、ホモ・サピエンスは初期から比較的小規模な家族に分かれて生活していたことが、アフリカのカタンダ遺跡における石や骨のゴミの分布からわかる²³⁾。

だとすれば、ゴリラ的な家族がホモ・サピエンス登場まで一貫して存在したわけではなく、ネアンデルタール人とホモ・サピエンスの共通祖先はおそらく、家族という単位のないチンパンジーやボノボのような群れを形成しており、そのなかでインセスト願望を持つようになったホモ・サピエンスが家族や姻戚関係を形成したと考えるべきであろう。

ネアンデルタール人の使った石器の素材がほとんどすぐ近くの産物に限られるのに対して、クロマニヨンは数百キロ遠方でとれた

素材の石器を使用している²⁴⁾ことも、前者が姻戚関係を持たなかったのに対して後者が姻戚関係ネットワークを発達させていたことの傍証となるだろう。父系的集団にとって姻戚関係は女性の交換関係であり、それと資源・物財の交換関係は並行して発達しがちだろうからである。

一般に、インセスト回避心理は類人猿に本来的に備わっているものであり、それと矛盾する行動傾向を人類が身につけ、両者の葛藤に対処するなかで、人間特有の社会制度や文化が生み出されていった筋道が、以上の検討によって、理論的にも実証的にもかなり明晰になったのではなからうか。

このような考察は、霊長類学や先史人類学の最近の成果を踏まえた山極や榎本の説を大枠として前提したものであるが、山極と比べてみると、父性の役割にあまり大きなウェイトを置いていない。むしろその逆に、榎本が指摘するネオテニー的進化による精神的幼児化こそが、人間社会成立の鍵なのではないかと私は問題提起したい。以下で、そう考えるべき根拠を挙げてみよう。

父系血縁を重視するような単位集団間を女性が移動するというゴリラ以降の類人猿に共通する傾向は人間にも引き継がれ、多くの社会では結婚とは女性の移動であり、結婚に際して男が移動する社会では異動先は近隣に限られるという傾向がある²⁵⁾。それは、父性的な現象ではなく、女兒に比べて男児が母親のもとから容易に離れられないというゴリラ以降のオスのマザコン的心理の帰結であろう。そして、チンパンジーやボノボにおいて、性的に成熟する以前のオスはしばしば母親の膣にペニスを挿入して性交し、成熟後にそれはみられなくなるものの、母親への依存心は強く残る。人間の男性が思春期以降も、幼児期に接した若い母のイメージに固着し、母子相姦願望を無意識に持ち続けがちなのは、そのような類人猿のマザコン的心理の延

長上に位置づけられるだろう。

思春期以降、幼児性欲に由来するインセスト願望は消失しなくなるが、インセストを回避しようとする心理は従来通り発現するため、大人たちは幼児性欲そのものに対しても抑圧的な態度をとるようになったものと思われる。息子のペニスを手で弄ぶことは許されても、息子のペニスを母の膣に挿入させることを奨励したり黙認したりする社会はまずないように、チンパンジーやボノボの母と比べれば人間の母は息子の性欲に対して抑圧的にふるまう。そのような母や周囲の人達の幼児性欲に対する抑圧的な態度が影響して、4歳以降の幼児はインセストを巡る願望と回避との間の葛藤を体験するようになるのである。矛盾・分裂した自己の一方を投影して自分の心の中で他者イメージを構成するためには、そのイメージを現実に体現する他者が存在しなければならない、ということからも、この仮説は支持されるだろう。

人間に至る霊長類の進化は、形態も行動も、幼児期の特性を成体になっても保持し続けるという、ネオテニーの深化によって特色づけられるが、オスのマザコン化も、幼児期の体験が大人になってもなお終生影響し続けるという精神分析の根本テーゼも、その例証にほかならない。そして、母親に課せられた産後の性タブー期間が長いほど、母親の息子への性的態度が強まって彼の母親への性的愛着心も増し、それは大人になっても持ち越されてインセスト恐怖を反映した諸慣習が強く見られるようになるということは、民族誌データをもとに実証されている²⁶⁾。また、男女を問わず、幼児期に異性の親への性的愛着を強く持った人ほど異性の子に対して性的・誘惑的に振る舞いやすいということもしばしば指摘されている。したがって、幼児期の体験や、それを規定する文化・慣習に応じて、異性親子相姦願望の強さにはかなり大きなばらつきがあることになるだろう。

このように、ホモ・サピエンスの登場とともに人間は禁断の果実を口にしたのである。そしてそれは、幼児期における母親の性的行動によって生まれた母子相姦的心理を成人後の息子が持ち越すことに起因しているので、まさしくミトコンドリアのイブのころの女性が最初に口にしてアダム（たち）にも与えたのだ。禁断の果実を共に食べたとはインセストの比喻であり、実はアダム（たち）はイブ（たち）の腹から生まれた息子だったと、象徴的に表現できるかもしれない²⁷⁾。

イブの生きていた当時人口が激減して40人から1万人程度になったという説もあり²⁸⁾、そうだとすれば、人口減少によるインセストとともに遺伝子の偏りが生じて爆発的に進化が進んだという、原人登場に関する覆本の仮説は、むしろホモ・サピエンス誕生について説得力を持つことになるだろう。人口規模が少ない状態で、現実の近親結婚が、近親相姦願望を引き起こす遺伝子の急速な普及とともに起こったという風にしか、近親相姦願望を持つ特殊な種の発生は説明しようがないのではなからうか²⁹⁾。

成人した後の男性の近親相姦願望は、一般にそれを主に育んだ老いた母の代わりに、姉妹や娘へと向けられるということは、精神分析学的研究によって明らかにされている³⁰⁾。したがって、ゴリラ以降の類人猿の家族や単位集団と同様に父系的で、成長した女性が性的相手を外に求めて出る傾向が強かったところに、近親相姦願望に由来する父 娘や兄弟 姉妹間の強い愛着心が新たに加わり、男性が娘や姉妹の結婚相手について強い関心を持つようになるとともに婚出した娘や姉妹との関係がその後も持続するようになって、姻戚関係が生まれたのであろう。

ネオテニーという進化現象は、理論的には次のように考えることができる。哺乳類や鳥類では、親子や異性きょうだいなどの、きつい近親交配を避ける傾向があるものの、それ

が完全には淘汰されず、一般に低い確率で残存しているが、その理由の一つは、きつい近親交配の場合メスの繁殖開始年齢が他よりも低くなるという繁殖上の利点が、近親交配で生まれた子の生存率の低さ、すなわち近交弱勢をカバーするからだと考えられる³¹⁾。人間においても、近親結婚ほど初婚年齢が低くなる傾向が見られる。だとすれば、人口減少に伴って群れの外からの女性の移入が減り、群れ内での性交・繁殖が行われ出した際にも、きつい近親性交を（平均より高い頻度で）許すような遺伝子を持っていた個体によって行われたはずであろう。そのような遺伝子のない女性は、繁殖機会が少なくなったため平均初産年齢が上がり、初産年齢差の拡大はきつい近親交配を許す遺伝子の普及に極めて有利に作用したはずである。また、きつい近親交配を許す遺伝子は、（とりわけメスの）性的成熟を他の面での成長と比べて早める（逆に言えば、性以外の成長を遅滞させる）遺伝子と同じであると考えられる。なぜなら、近親性交を回避する行動はチンパンジーやボノボの母子の例からして、生殖可能となったところに現れるのであり、性的成熟が他の面より早く進めば、いわばまだ子供なのに生殖可能となり、近親交配が実現してしまうと考えられる。母がまだ子供だと思って息子に挿入を許したところ妊娠してしまうとか、まだ子供だと思っていた同母妹と遊んでいる内に発情して性交に及び、妊娠してしまうなどである。このようなメカニズムによって、性的成熟個体における近親相姦願望の普及とネオテニー化とが相携えて進行することもうまく説明できる。人間のネオテニーが男性よりも女性に顕著である³²⁾ことも、これで説明できる。また、このような場合、近交弱勢には、不適応個体の厳しい淘汰によって急速な進化を促すというメリットがあっただろう。

5. 家族の起源としてのインセスト

近親相姦願望抜きで人間社会の起源を論ずる山極の説においては、母に限らず、父と息子が同一の異性と性交しないという、血縁を前提としないインセスト禁止規則の成立によって、父と息子の世代の違いが明確となったであろうことの意義が強調されているが、それには疑問を感じる。

すでにゴリラにおいて、父の後を継ぐべく成長しても残った息子は、異母妹とは交わらないうことであり、山極の要件は満たされている。他方、人間はといえば、インドやチベットなど、兄弟で妻を共有する一妻多夫婚慣習があるところでは、父と息子が妻を同時に共有するケースもしばしば許容されてきたように、山極の要件を満たさない人間社会もある。

日本においても、崇徳天皇の母待賢門院は、鳥羽天皇に入内する前から白河上皇と関係があってそれは入内後もつづき、崇徳の実の父が系譜上の曾祖父白河であるらしいことも遍く知られていたが、白河は何の制裁も受けず、崇徳即位の妨げにもならなかった。これは祖父と孫による事実上の一妻多夫が黙認された例といえよう。光源氏が父桐壺帝の中宮藤壺と密通し、その所生冷泉帝が桐壺帝の子として幼くして即位し、実の父である源氏が後見として実権を掌握するのも、フィクションとはいえ、父と息子による女性の共有や、世代的に混乱したその所生子であっても皇統の父系血縁が保たれていれば後継者として許容するような天皇制のあり方を証している。このような源氏物語が貴族達の間で広く読まれていたからこそ、白河の性的放恣も源氏をモデルとして実行され、黙認されえたのかも知れない。

同時に父と息子や祖父と孫が女性を共有することはタブーであっても、父王なきあと後

宮をレガリアとして息子が継承する慣習は天皇家をはじめ珍しくないし、その場合、父の子供と息子の子供を同じ女性が産んでよいと考えられているのだから、世代の混乱が許容されていることになる。

旧約聖書においても、アブサロムは父ダビデ王を殺して王位を篡奪しようとして、父がエルサレムの家を守るために残した10人の妾のところに入り（サムエル記下、16 2以下）、アドニヤは父ダビデの晩年の身のまわりの世話をしたアビシャグを父の死後妻に所望したため、既に即位していた弟ソロモン王に殺された（列王記上、1.1~2.25）。このように、父の妻妾を獲得することはしばしば息子による王位の篡奪や継承と結びつけて観念されてきたのである³³）。つまり、ゴリラと比べて人間は世代区別に関してより柔軟であり、したがって父性から自由な生物なのである。この点でも人間は、父系血縁関係にあるオスたちがメスたちを共有し、年長オスの権威が自明ではないようなチンパンジーやボノボに近い面を持っていると言うべきだろう。

また、山極は、人間の文化や社会にとってこれまで不可欠だった父性が衰退するという現代の傾向を認めながら、その混乱に人間は耐えられるか、いかに対処しえるかという切実な問いについては、明確な展望を提示できずにいる。逆にいえば、できる限り父性を説明要因から排除しながら、人間社会の起源を論じることは、父性の衰弱した現代社会の可能性を考えるための準備としても、意味のあることではなからうか。父性によって説明する際には、人間の文化や社会の創造者として、父性的なるものを想定するような暗黙の発想があるとすれば、その発想から自由になることこそが、現代に生きるわれわれには、要請されているのだ。

ネアンデルタール人に想定されているように、父親を特定せず、チンパンジーやボノボのごとき群れを形成している状態をむしろ出

発点にとって考えよう。群れで生まれた女子は適齢期になれば外に出るはずであるが、人口減少の結果、群れ相互間での女子の移動が困難になり、群れ内部での性交による人口維持が図られたとすれば、母子や同母異性きょうだいや母に親しい男性（必ずしも父ではない）と娘など、その秘密を外部に対して隠しやすい、親密な間柄でまず行われ、前節でみたようにネオテニー化が進展した。その場合、所生子の父が明らかであっても父とは群れ内で決して認知されなかったはずである。とはいえ、本来ありえない所生女子の出産の原因を作った男性が誰であるかという関心の高まりは、父親の社会的認知の基盤となっただろう。このようにして、近親性交の秘密を群れの他の個体に対して隠す必要から、群れの内部に、閉鎖性の高い単位集団が新たに形成されただろう。

次に、群れ内部に新たに生まれつつあった単位集団相互間での異性交は単位集団内部での近親性交よりも望ましいものとされ、群れの内部で所生女子を交換し合う新しい単位集団が人間特有の家族の原型になったと考えることができる。とはいえ、群れ内単位集団間での異性交も、群れにとって、近親性交よりも抵抗が少ないとはいえ、従来ほとんどなかったことであるから、群れ全体に対して承認を求めべき問題となって、婚姻が制度化されただろう³⁴⁾。婚姻制度化の結果として、父親も社会的に認知されるようになっただろう。つまり、婚姻とは本来、家族内近親相姦に準ずるような、群れ内での変則的な性関係であり、婚入した家族内部へと女子の正当な性交相手を限定し、出身群れを同じくする他の男性との性関係を禁じた結果、父親の社会的認知も可能となったことになる。またそうだとすれば、父息子や兄弟が妻を共有することも、一つの自然な帰結であっただろう。

また、婚姻が起源においては、外婚的な群

れの内部における性関係の例外的な社会的承認であったとすれば、婚出した女性と生家との間に終生の絆が持続するに至ったことも自然であろう。女性は群れを離れずに生涯過ごすことができるようになったからである。そのような生家との永続的な絆が、群れの分裂後や異なる群れへの婚出においても拡大適用されることによって、群れと群れとを結びつける姻戚関係の形成も可能となったものと思われる。つまり、近親性交を起源とする家族や婚姻の制度化が、類人猿一般に見られ、そしておそらくネアンデルタール人までのホモ属に存在したような、単位集団相互間の絆の欠如を乗り越えることを可能としたのである。

現に多くの社会において近親相姦は家族内で秘匿され、建前上家族はタブーを受け入れているが、それは、外婚単位である群れに対して近親性交を隠すという家族制度の起源を想定すると、容易に理解できる。タブーのある近親でなくとも、配偶者はそのような近親の代理 = 象徴であることが多いという事情も、外部に対して人間の近親相姦的な性行動を隠すために、家族という閉鎖的単位が形成されることを助けただろう。

また、チンパンジーやボノボにおいては、血縁関係にあるオスがメスを共有しつつそのなかでほぼ乱交状態にあるのだが、人間社会において、一夫一妻をたてまえとするキリスト教社会も含めて事実上一夫多妻が普遍的である³⁵⁾のは、ゴリラとの連続性の代わりに、そのような乱交のもとできつい近親交配が行われだしたと考えればうまく説明できる。進化を加速化するという近交弱勢のメリットと比べてデメリットが軽いとすれば、男性近親（兄で代表させる）にとっては、自分の子を女性近親（妹）が妊娠する回数が多いほど、自分の遺伝子が残る可能性が高い。それに対して、妹は兄と遺伝子のかなりを共有してい

るので、兄が自分以外の女性との子を設けることは、自分の出産可能性が著しく下がらない限り、自分だけが兄の子を産むことよりも望ましい。他の女性と兄の間の子とも彼女は血縁なのである。したがって、兄は妹を性的に独占しようとし、妹は兄が他の女性とも交わることを妨害せず、むしろ支援することが、兄妹双方の、自らの遺伝子を残すという戦略にとって、いずれも望ましいのであり、その最も自然な帰結が一夫多妻制度である。自分以外の妻が自分の姉妹であればなおさら望ましいことになり、同居する複数の妻の多くは姉妹であることも説明できる。

兄が妹を性的に独占するために、当初は何のコストもかからなかったはずである。なぜなら、他の同郷所生男性は全て他郷出身女性と性交するならば、秘かに性交した兄の精子以外、群れに留まる妹の卵子に到達できない。それに対して、他の群れからやってきた女性たちを妊娠させるためには、兄は他の同郷男性たちとのいわゆる精子競争に勝ち抜かなければならないのである。したがって、妹と性交して我が子を設けることは、兄にとって自分の遺伝子を残すための最も確実な方法なのであるから、兄は公に性交を許されている他郷出身の娘たちと比べものにならない、特別に愛おしい女性として妹を位置づけることになるし、性的独占のために暴力を行使することなどありえなかった。

妹のほうは、兄と秘かな性交を経験すると、同郷の他の魅力的な男性とも同様に密会するようになるかもしれない。しかし、兄は妹を性的に独占しようとするものの、妹と他の男性との間の子であっても自分の血縁であるので、妹の「不貞」についてはかなり寛容なはずであるし、「不貞」の子を可愛がるだろう。

他の群れでも兄や他の同郷男性の子を産んで群れに留まる女性が増えれば、外部から性交相手を求めて入ってくる女性が減り、精子

競争率が高まるため、あらゆる群れで兄はますます妹を大切にしておき、それがますます精子競争率を高めるというフィードバックが働いて、群れ間の遺伝子交換は減り、群れ間での遺伝子の相違の拡大は、より優れた遺伝子を多く持った群れのみが相対人口を維持ないし増加させるという風に、マクロレベルでも自然淘汰を加速しただろう。

進化過程が安定（均衡）状態に近づくなどして、進化速度を高めるという近交弱勢・群れ内性交のメリットに比べてそのデメリットが強まれば、兄は自ら進んで妹に同郷・異郷の他の男性とも交わるよう仕向け、自分の遺伝子と受精段階で競争させようとするであろう。イヌイットの妻貸しのように妻・妹・娘に客人の性的なもてなしをさせる慣習もそのような心理の名残りといえよう。また、現代イギリス女性のデータによれば、パートナーと五日以内に性交したという条件付きのパートナー外性交（婚外性交などの浮気）確率が、排卵期に著しく高い³⁶。これも、兄と同様妹も精子競争によって近交弱勢を緩和するような動機付けを発達させてきたことの名残りであろう。つまり、兄妹は妹の「不貞」に関して同じように感じ、兄は妹に「不貞」を薦めさせようのだ。

このように妹の性的独占を進んで放棄するとともに、妹が他の群れに移籍しない代わりに、他の群れの男性であっても妹の許に通ってくることを黙認したり、遠来の男性を歓待したり、妹の産んだ子を自分と彼の共通の子として男たちは義兄弟になるといったことが始まっただろう。妹が第二の夫を迎え、兄も第二（さらには第三以下）の妻のもとに通うようになり、贈り物を交換する。これが、姻戚関係や群れを異にする男性相互の交流のはしりなのではなからうか。さらに近交弱勢のデメリットについての主観的ないし社会的な認識あるいは幻想が高まれば、兄妹は性交を断念し、その代替 = 象徴として第二の夫、第

二の妻が昇格することになっただろう。

ところで、インセスト・タブーによる兄妹夫婦と第二夫婦との逆転劇よりも前に、妻としてくれる男性近親のいない女性や彼らと喧嘩して生家を飛び出した女性だけが、自分の生まれた群れから他郷に移籍して不特定多数の男性を相手にするようになるという状態が生じていたはずである。そのような性関係が、自分を性的に庇護する責任と能力のある男を失って、多くは知人のいない異郷で不特定多数の男を相手とすることを生業とする売春婦たちや、彼らに反発して、家出したり彼らに隠しながら、大都市の雑踏やテレクラで不特定多数の男に性を売る売春人妻・援助交際少女たちへと受け継がれていった。今日では、頼れる男性を失った不幸な女性、あるいは不道徳な女性の営みとされているこのような性のあり方こそが、チンパンジーやボノボとの共通祖先以来、われわれが受け継いできた、もっとも由緒あるものなのである。

以上より、かなりの頻度できつい近親交配を重ねた末に、妹＝妻に対する貞操要求の低い一夫多妻と一妻多夫（おそらく大部分は兄＝夫と兄の第一の友人の二夫）が、インセスト・タブーと姻戚関係が形成される直前の時点において、遺伝子レベルでの淘汰の結果としてみられただろうことが、理論的に示された。そこで、近交弱勢のデメリットが社会的に認識されるか、過大な形でその幻想が持たれるかしたため、インセスト・タブーと婚姻とが制度化された結果として、インセストを巡る遺伝子状態は自然淘汰から隔離されて、ほぼ保存され続けることになり、近親相姦願望も当時の強度を失うことなく潜在的に持続しつつ、配偶者をタブーのある近親異性の代理・象徴と意味づけ続けたはずである。インセスト・タブーの普及は、それが社会的連帯を形成する上で、とりわけ商業が未発達な段階において、試された他の方法を圧倒したからだ、文化進化論で容易に示される。し

かし、商業の普及とともにインセスト・タブーの範囲が縮小する傾向も指摘されている³⁷⁾。従来、一夫一妻制ないし単婚小家族が商業の発達、とりわけ西欧化と等しい意味での産業化と結びついてきたのは、核家族内血縁がほぼ通文化的にインセスト・タブーの最小範囲であることと関連しているだろうが、近代的核家族の崩壊は、生殖・性医療技術や遺伝子工学の発達とともに、われわれを未知の時代へと旅立たせずにはおかない。

現在テレクラ・インターネット売春や援助交際と呼ばれている最先端性風俗こそが皮肉にも最も由緒ある性関係であることも理論的に明らかとなった。そのような不特定多数との性を求める願望は、ホモ・サピエンス登場とともに新たに台頭したインセスト願望と、おそらく遺伝的にはトレード・オフ関係にあって、生得的に一方が強い人は他方が弱いという風にかなり個人差があるものの、男性のみならず女性も含めて全ての人がいずれをも持ち、遺伝と経験の条件次第でどちらも爆発しえるのであり、売春、遊里や援助交際など、不特定多数との性の願望実現の場を連続と作り続けてきたのである。

したがって、売春や援助交際を撲滅すべきだという道徳主義こそ人間の最も根源的で持続的な自然を否定する暴挙なのである。また、インセスト・タブー直前または直後における異性きょうだい関係にできるだけ近い形で恋人・配偶者に対し、直前または直後の家族内でのように血縁者に対するのが、インセスト・タブー以降性遺伝子の自然淘汰を凍結してきた人間にとって最も自然な家族のあり方であるし、それによってはじめて売春や援助交際は減少しえるだろう。このような、インセストとインセスト・タブーの狭間は、インセスト・タブーそのものを見直すために、これからの社会にとって不可欠な橋頭堡であるのみならず、人間にとって永遠の真理・真実の愛が自らを開示する場でもある。家父長

制的な一夫多妻制や一夫一妻制など、この場所からの乖離は、大規模人工灌漑農業や資本制商工業などへの適合性によって説明しえるものではあるが、自然な人間性に対して抑圧を強いる、あるいは、望ましい性愛的価値よりも、社会的名誉や物質的繁栄をはじめとする他の諸価値を優先していると批判することもできるだろう。

西洋の一夫一妻制においては、相互に相手を性的に独占し、他の異性を排除することこそ真実の愛だとする考え方が強い。しかし、きつい血縁関係にある男女の場合、相手が他の異性ともうけた子供も自分のかなり濃い血縁であるという事情があるので、相互に相手への貞操要求は低くなり、近交弱勢の認識ないし幻想が強まるほどにそれは低くなり、自らは身を退こうとするのがインセスト・タブーであると、遺伝子レベルの理論的考察から言える。異性配偶者はきつい近親異性の象徴であり、できるだけそれに近いように配偶者と接するのが真実の愛であるということが、私の主張である。

異性パートナーを真剣に愛する他の同性がいた場合、近代西洋流の発想では、とりわけ男性の場合、その同性と命を賭けて争い、パートナーを独占しようという気持ちの真剣さが真実の愛であるということになるが、私に言わせれば、そのような気持ちは、排除しようとする同性への暗黙の殺意を含んでいて、言葉や態度に殺意が現れたり、実際の暴力がその同性やパートナーに対して振るわれるに至るものであるから、真実の愛どころか反道徳的・犯罪的なものであり、そこには愛のかけらすらない。本当にその同性（パートナーへの同性愛ならば異性）がパートナーを愛し、パートナーにも拒む気持ちがないならば、その同性を、異性きょうだいや異性子に結婚を申し込んだ人のように遇し、その相手を受け入れて、その人とパートナーを共有しようと努力することが、私には真実の愛であ

るという感覚がある。きつい血縁異性関係が男女関係の範型であり、異性パートナーは異性きょうだいの象徴であるとするれば、私のこの感覚は遺伝学と精神分析学的象徴論とによって、その正しさが証明されたことになる。

同様のことは、たとえば高群逸枝によって主張されてきた。つまり、相手の性を排他的・独占的に所有しようという発想は、異性きょうだい関係の強かった古代の日本にはなく、それが失われた家父長制時代になってはじめて、男性が女性に対して所有権を確立し、それに応じて女性のほうもパートナーの異性関係について嫉妬深くなっていったことを、彼女は詳細に描き、古代の異性関係の復権を訴えたのである³⁸⁾。パートナーの性を独占したいという所有欲を克服することができれば、それを出发点として、われわれはこれまでの経済を支えてきた私有制の論理を補完したり一部代替するような新たなパラダイムを創出し、先進国のエゴを克服して、地球環境問題や途上国開発問題、人口問題にもよりよく対処しえる、新たな社会経済体制を模索することもできるのではなからうか。とりわけ、一妻多夫は人口抑制、一夫多妻は人口増加に効果的であり、一夫一妻制は人口問題解決の大きな足枷なのである。

あとがきに代えて

4 節の第 7 段落および最後の段落と、5 節の第 7～10 段落は再校段階で、5 節の第 11 段落以降は三校段階で新たな着想を得て執筆したため、原稿（初校では内容に及ぶ変更はなかった）・再校・三校各執筆分の間には必ずしも論理的な整合性はないが、三つの部分の矛盾は私の思考の進展を表しているので、段階を追ってそれを追体験していただきたい。本論文のように常識を覆す内容のものは、そのような段階を踏む方が理解を得やすいと思うの

で、あえて三つの部分を整合化するような手は加えなかった。

注

- 1) 本篇の叙述とかかわりの深い京都学派の代表的な著作として、以下を挙げておく。今西錦司『人間社会の形成』NHK ブックス、1966年、伊谷純一郎『霊長類社会の進化』平凡社、1987年、山極寿一『家族の起源 父性の登場』東京大学出版会、1994年、榎本知郎『性・愛・結婚 霊長類学からのアプローチ』丸善ブックス、1998年。
- 2) 伊谷『霊長類社会の進化』、164頁。
- 3) 同、195頁。
- 4) G.P. マードック、内藤莞爾監訳『社会構造 核家族の社会人類学』新泉社、1978年、W.N. スティーブンス、山根常男・野々山久也訳『家族と結婚』誠信書房、1971年。
- 5) ここで言う同性愛とは、抑圧なしの性的欲望の存在を必ずしも前提とはしていない。たとえば、民族誌的には一夫多妻では一般に同じ夫を持つ妻たちは別居しており、妻たちが同居するのは多くの場合姉妹であるし、一妻多夫の多くは兄弟が妻を共有するという形態をとるが、これらは、同性きょうだい愛が、一人の異性を共有するという重婚形態を許容する大きな要因となっていることを示している。バイセクシャルな同性愛者たちが異性の配偶者を共有することも、これに準じてとらえられるだろう。
- 6) 平山朝治「フロイトと妻の妹ミナの恋 エディプス・コンプレックスが抑圧したもの」『経済学論集(筑波大学社会科学系)』第42号、2000年、同「性と家族を巡る思想状況 『男はつらいよ』を中心に」駒井洋編『日本の選択 もう一つの改革路線』ミネルヴァ書房、2002年。
- 7) E. Westermarck, *The History of Human Marriage*, Macmillan, 1891.
- 8) R.S. Bagnall and B.W. Frier, *The Demography of Roman Egypt*, Cambridge University Press, 1994.
- 9) 高群逸枝『女性の歴史 上下』理論社、1966年(『高群逸枝全集 第四～五巻』)、講談社文庫、1972年。
- 10) B. マリノウスキー、泉 靖一・蒲生正男・島澄訳『新版 未開人の性生活』新泉社、1999年、70頁。
- 11) 伊谷『霊長類社会の進化』、111～5頁。
- 12) 祖父江孝男『アラスカ・エスキモー』社会思想社、1972年。
- 13) M.E. スパイロ、井上兼行訳『母系社会のエディプス フロイト理論は普遍的か』紀伊國屋書店、1990年、124頁。
- 14) 以上は言うまでもなく A. スミス、水田 洋訳『道徳感情論』筑摩書房、1973年の説をふまえたものである。新古典派経済学が利己心によって説明する財・サービスの経済的交換についても、スミスは「交換性向」に基づく交換行為が双方の利己心によっても支持されるようになるという風に、「交換性向」を重視する説明を行っている。私見によれば、インセスト願望と回避との心的葛藤の妥協として姻戚関係が生み出され、それがシンボル操作、財・サービスの儀礼的ないし経済的交換、立場の交換による倫理の全ての揺籃となった。
- 15) W. オールマン、堀瑞絵訳『ネアンデルタールの悩み 進化心理学が明かす人類誕生の謎』青山出版社、1996年、第2章。
- 16) 山極寿一「インセスト回避がもたらす社会関係」、川田順造編『近親性交とそのタブー』藤原書店、2001年。
- 17) 人間(ヒト科)の分類には、猿人・原人・旧人・新人という古い4分類法と4属17種という新しい分類の二つがあり(植崎修一郎「ホモ属の種内変異と種間関係」『共存の維持と破綻 ヒト科の多様性と種間関係をいかに理解するか』日本人類学会・進化人類学分会・第2回公開シンポジウム、2000年、http://anthro.zool.kyotou.ac.jp/evo_anth/symp00

- 11/narasaki.html) しばしば混用されているが、旧分類の原人以降が新分類 4 属のなかのホモ属にあたる。また、かつて旧人はホモ・サピエンスの亜種、古代型ホモ・サピエンスと考えられたこともあったが、新人 = ホモ・サピエンス = 現生人類である。
- 18) かつては、乾燥化に伴って森林から草原へと生活環境が変化した結果、直立二足歩行をする猿人が登場したと考えられていたが、最近の発掘成果によれば猿人の生息環境は森林性であり、腕で枝から枝へと渡り巡るブランキエーションの際に背骨を垂直に垂らすようになった結果、彼らは直立二足歩行もできるようになったという説が有力視されるようになっている(河合信和『ネアンデルタールと現代人 ヒトの500万年史』文春新書、1998年、第3章)。
- 19) 初期の原人は個体ごとの変異が大きく、体の小さなホモ・ハビリスと区別して大型のものを別種のホモ・ルドルフェンシスと呼ぶ提案もなされたが、頭骨の詳しい分析の結果統計的に有意な差はないという批判があり、体の大きさの違いは種差ではなく性差ではないかという説もある(埴原和郎『人類の進化 試練と淘汰の道のり』講談社、2000年、75頁)。初期原人段階でも性差が縮小していなかったとすれば、榎本の説明はさらに説得力を削がれることになる。
- 20) A.C. ウイルソン / R.L. キャン、尾本恵市訳「現代人はどこからきたか アフリカ単一発生説」『日経サイエンス』第22巻6号、1992年、C. ストリンガー / R. マッキー、河合信和訳『出アフリカ記 人類の起源』岩波書店、2001年。
- 21) たとえば、インターネット博覧会の埼玉県ピリオン・人類博物館 (Museum of Human Evolution) に、最近の通説が分かりやすくまとめられている (<http://www.saitama-kenpaku.com/jinrui/index.html>)
- 22) 河合『ネアンデルタールと現代人』、107頁。
- 23) ストリンガー / マッキー『出アフリカ記』、16頁では、「核家族」としている。
- 24) 河合『ネアンデルタールと現代人』、126頁。
- 25) スティーブンス『家族と結婚』115～8頁。
- 26) W.N. スティーブンス、山根常男他訳『エディプス・コンプレックス 通文化的実証』誠信書房、1977年。
- 27) ミトコンドリアのイブが近親相姦願望を引き起こす革新的な遺伝子を最初に持った人だという保証はなく、そうである確率は極めて低い。ミトコンドリアのイブが生きていたころには、ホモ・サピエンスの男女は何人かいたが、彼らのミトコンドリアDNAのうち、現在まで伝えられているものは彼女のものだけだという以上のことは言えず、他のDNAの多くは彼女以外の人々のものが伝えられてきているはずだからである。
- 28) 河合『ネアンデルタールと現代人』107頁。
- 29) カタンダなど高度な精神能力を示す初期ホモ・サピエンスの遺跡があるものの、四万年前頃になってようやくその潜在能力が世界中で一斉に開花しはじめ、それはあらゆる地域のホモ・サピエンス集団が突如、急激な人口激減を経験したのとほぼ同時であった(ストリンガー / マッキー『出アフリカ記』、261頁)。人口減への対応として再び頻発したインセストを巡る心的葛藤の高まりや社会的混乱が、長らく休眠状態にあった精神能力の開花を各地で一斉に帰結したのであろう。
- 30) スパイロ『母系社会のエディプス』第五章。
- 31) 青木健一『『間違い』ではなく『適応』としての近親交配』、川田編『近親性交とそのタブー』。
- 32) S. グールド、浦本昌紀・寺田鴻訳『ダーウィン以来 進化論への招待』ハヤカワ文庫、1995年、331頁。ネオテニー化して乳飲み子を養ましがる男性を惹きつけるために、女性は、性的成熟とともに乳房が大きくなるという、類人猿には見られない特徴を獲得するとともに、チンパンジーやボノボが発情を誇示して

いた性皮をなくし、女性器を奥に隠して性的未成熟を装い、抱き合ったまま挿入させて性交であることすら隠す（従来、このような正常位はなかった）など、近親性交が実現する確率を高めるために身体的特徴全体は著しく幼形化したのである。

33) A.M. Hocart, *Social Origins*, Watts, 1954, p. 143 .

34) つまり、インセスト・タブーと婚姻とは起源において、きつい近親交配を減らしつつ、旧来はあまりなかった群れ内での交配を可能とするための文化的工夫であったといえよう。ひとたびそれが制度化されれば、きつい近親交配を高頻度で引き起こす遺伝子が近交弱勢によって自然淘汰されるまでもなく、近交弱勢の発現は予防されることになる。インセスト・タブーと婚姻の制度化によって、ホモ・サピエンスにおいては、かなり強い近親相姦願望が自然淘汰に委ねられることなく人為的に保存されることになったわけである（cf. K. Aoki and M. W. Feldman, “A Gene-culture Co-evolutionary Model for Brother-sister Mating”, *Proceedings of the National Academy of Sciences*, Vol.94, November 1997）。したがって、性と生殖とが分離した現代においては、避妊など他の方法で近交弱勢が予防できるので、インセスト・タブーの意義が改めて問い直されることは避けられないだろう（婚姻については、

同性婚や複婚を許すべきだということはすでに論じた）。たとえば、父娘や異性きょうだい間では、性的虐待による心的外傷、母子では子供の自立を損なうなど、心理的な理由を想定しなければならないし、カウンセリングや性的虐待の公的な告発などが奨励されることになるが、そのような方向での変化は現実に顕著である。他方、親和的で精神障害を伴わないような近親間の性的関係を禁じる正当性は失われることにもなる。

35) R.D. Alexander, J.L. Hoogland, R.D. Howard, K.M. Noonan, and P.W. Sherman, “Sexual Dimorphism and Breeding Systems in Pinnipeds, Ungulates, Primates and Humans”, in N.A. Chagnon and W. Irons eds., *Evolutionary Biology and Human Social Behavior*, Duxbury Press, 1979.

36) M.A. Bellis and R.R. Baker, “Do Females Promote Sperm Competition? Data for Humans”, *Animal Behaviour*, Vol.30., 1990.

37) Y. Cohen, “The Disappearance of the Incest Taboo”, *Human Nature*, Vol.1, 1978, G.C. Leavitt, “The Disappearance of the Incest Taboo: a Cross-cultural Test of General Evolutionary Hypotheses”, *American Anthropologist*, Vol.91, 1989.

38) 高群『女性の歴史 上下』。